

山すべり

吉岡 晶子

クラスに「どろんこ怪獣」とでも言えるやんちゃ坊主三人組がいる。三人は四歳からクラスに仲間入りした。それぞれ個性があつて面白いが、入園当初からなんとも手を焼かせられたことか。その三人が、自分たちのお気に入り場所を見つけ、これこそ自分たちの遊び、と言えるような遊びを極めていった過程をたどってみようと思う。

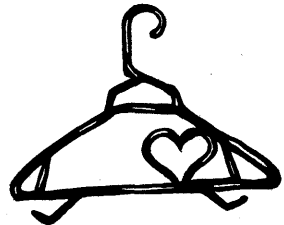
まず三人について。三人ともコミュニケーションのとり方が不器用である。本当は素直なのに、わざとみんなからはずれるようなことをしたり、伝えたいことがあると、からだの方が先に動いてしまつてあちこちで衝突を起こしては後悔したり、大好きな人にはちよっかいをだして反応してもらつたりもする。

少々理屈っぽく、「こうするべきだ」と言っているわりにはやっていることは別。一人ひとりとゆっくり話をすると本当に素直なのに……。そんな三人が寄り添うように集まって結束を強くしていった。

六月。園庭の高台にある小さい山。傾斜が案外急ですべりやすく、三歳児はなかなか登れない。てっぺんから駆け下りるのは勇気がいるし、スリルがあつて面白い。一人で登れるようになって頂上に立つと、達成感があり、大きくなった感じがして自信がもてる。そのような傾斜を何人かが集まって キヤーキヤーワーワーすべっていた。ズボンのままなのでお尻は汚れて真っ黒。毎年よく見られる光景であり、その中に三人もいた。それを見て、私はダンボールを持ってきて「こ

れを敷いてやってみよう」とお尻の下に敷いてすべってみた。するとすぐに「先生、貸して」と言いきたり、部屋にダンボールを取りに行つてせつせと抱えてきた。一人ひとりマイダンボールを敷いてすべり、山の上はにぎやかになってきた。

次の日、三人は朝からダンボールを抱えて山に行っていた。そのうちA夫が「ガムテープちょうだい」とやってきた。少し遅れてB夫、C夫も汚れたダンボールを持ってやってきた。「繫ぎたい」とのこと。二人すべり、三人すべりをやりたいらしく、それぞれのダンボールを繫ごうとしてい



た。苦勞して繋ぎ、山に持つて行って三人乗り。うれしそうに乗っているが、三人の息が合わないとうまくすべらない。自分が先頭になればうまくいくと思っているらしく「ちよつと替わつて」と、三人で交替していたが、この時は一緒に座っているだけでも嬉しかったようだ。しかし、一生懸命繋いだダンボールは土が付くとすぐにテープが剥がれてしまう。剥がれては繋ぎ、剥がれては繋ぎしていたがそのうちにばらばらになってしまい、小さなダンボールで二人乗りをしたり腹ばいすべりをしたりしてすべり方バリエーションを楽しんでいた。

が高くなるのでひっくり返ってしまう。A夫はからだでむずかしさがわかったのだろう、からだを後ろに反らし、重心を低くしてみたり、なかなかのバランス感覚。と、感心したが、すぐに箱は使わなくなった。今では最初から大きいダンボールを持つていつている。

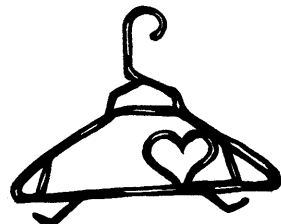
一学期の間に何度も思い出したように「お山に行こう」「ダンボールちょうだい」の声が聞こえ、三人の大好きな遊びになり、個性的な、なにかとハプニングを起こすメンバーのよりどころの「山すべり」になっていた。

二学期、九月になった。また三人の山すべりが始まった。B夫はやっぱり三人で一緒にすべりたいらしい。B夫は遊び方を思いついたり提案をよくするが、自分の思いが通らないと力で押し通し

がち。正しいことを言っているのにみんなが分かってくれないと怒っていらいらすることがよくある。関心のある人にはわざといやがることをしたりさからつたりと、素直に表せないタイプ。でも、この三人の中では、あまりそのようなことはしなかった。この遊びは理屈や言葉よりもとにかく全身で遊ぶことが楽しい。他の二人も言葉よりは言っていてられない。「ねえ、こういう順番にしよう」「こうしてみようよ」などいろいろ提案するが、他の二人はあまり聞いてくれないことがある。でも怒らずに「しようがないか……」といった顔をしている様子が見られた。思い通りに進めることだけでない楽しみ方を実感したのでろう。

この遊びでこれまでとは違った楽しさを知ったB夫は三人でいることが嬉しくて仕方が無いのだらう。ダンボールをどんどん何枚も繋いでいく。三人どころか七、八人は座れそう。それを見たA夫は「こんなに長いと、すべるとこ無くなる」とつぶやいていた。そう、斜面の長さ一杯になるぐらいになってしまっていたので、すべり降りる距離が少ない。でも三人はもとより、もつと大勢でやりたい、楽しいかもしれないというB夫の気持ちが表示されていた。

三人があまり楽しそうにやっているの、たまたまやって来た女の子たちもキヤーキヤー言いながら遊ぶようになった。C夫は「こっちは怖いよ」「こっちは怖くない」「こっちはもつとおもしろい」などと、場所によってすべった感じが違うこ



とを熟知しているらしく初心者に教えていた。自分が楽しく充実している時はC夫も友だちに素直に関わっているようだった。ここでもっと友達が広がったらいいな、とは思っていたが、そう簡単にはいかなかった。この頃から三人は裸足になって遊んでいた。

十月。そのうちに、三人の汚れ方が尋常でなくなった。手、足はもちろんのこと、頭のとっぺんから、顔、洋服、全身どろんこ「どろんこ怪獣」と言うのがピツタリ。もともと砂場でも泥んこになっていたので本人たちは平気。今度はいかにスピードを出すかの試行錯誤になっていたのである。スピード、つるつる、それには水、と考えた。裸足でじょうろやバケツを持って走っていたのはそのためだったのだ。山肌はぬるぬる。ス

ピードが出るので転倒。ころころ転がっていたのである。どろまみれは必然だった。あきれるやら感心するやら笑ってしまいうぐらいだった。

道具も変わっていた。ダンボールは汚れるし、水を使い出したので壊れやすい。で、ペットボトルに着目。つぶしておしりの下に敷いていた。確かによく滑り、スリル満点になっていた。また、立ち滑りにも挑戦、小さいダンボールに立ってスケボーのように滑っていた。

この頃は連日着替えとの戦いだった。全取替え。日によっては一日二回。汚れがひどい時にはシャワーを浴びることになった。それがまた嬉しく楽しくて仕方が無い。「シャワーかな」「シャワー無しだっさ」など囁き合っていることもあった。こちらの苦労はなんのその、裸の付き合いは一体感があるのか、着替えるときはみんない

い顔をしていた。大人に対して屈託のあるメン
バーだったが、シャワーを浴びたり、裸になった
りしているうちに「委ねる」ことの心地よさを味
わったのではないだろうか。

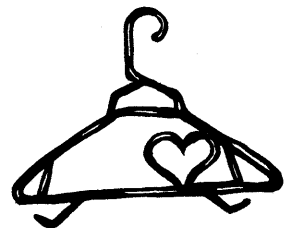
積み重ねはあるもので、全取替えもだんだん上
手になってきた。保護者の方には「大変でしょう
けど、今しかできないことなので、お洗濯のほう
をよろしくお願いします」と話し、思う存分やら
せてあげることにした。洗濯の苦勞を思うと頭が
下がり、着替えを手伝ってくれた先生方に感謝し
ている。

少しでも自分たちで後始末がやりやすいように
と思い、洗いやつめブラシ、足拭きマットを並
べてやり方を伝えているうちに、段々多少は自分
で汚れを落とせるようになった。ただ、汚れをつ
めブラシでこすると痛いので、フェイスブラシに

変えてあげたところ、気
持ちがよいらしく、嬉々
としてこすっている。

十一月。三人は物を使
わない立ちすべりが出来
るようになった。スノー

ボーラーのように立ったまま斜面をすべり降りる
のである。重心のかけ方、膝の入れ方はほかの人
にはなかなか真似ができない。「やってごらんよ」
「ほらね」と実演したり、「こつちなら大丈夫だよ」
と、びくびくしている友だちをポンと押して
は転ぶのを見て笑ったりし、自信满满、鼻高々に
なっている。これまでも斜面をすべることは度々
やってはきたが、ここまで「すべる」ことを極め
て達成感を味わってはいなかった。この三人は大



人になったとき、幼稚園で楽しかったことは、お山ですべったこと」と即答するのではないだろうか。お天気が悪くて外で遊べない時、B夫は「遊戯室ですべるの作ろうよ」と言っていた。これから園生活でも「すべるに関する科学」を実体験して追及していくかもしれない。私も頭を柔軟にして一緒に楽しんでいこうと思う。

このようにして、三人はからだを使って転げまわって遊び、気持ちもやわらかくなってきた。気の合う友だちができ、先生、大人に対しても弱さを見せたり、甘えられるようになってきたように思う。

彼らの課題は友だち関係の広がりであろう。山の場所も保育室から離れており、自分たちだけの空間を確保しやすい。それがかえって三人の結束

を固くしたのではないだろうか。思いっきり体を使って触れ合って仲良しの友だちになり、自分の居場所を確立したのは良いのだが、自分たちだけの世界になりつつある。閉鎖的にならないように、ここを基盤にして友だちを増やしていつて欲しい。

先日、お山でA夫が「きょうは、十一人もいる」と嬉しそうに言っていた。A夫はこの中で「要的存在」。A夫を窓口にして広がるように支えて行きたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)